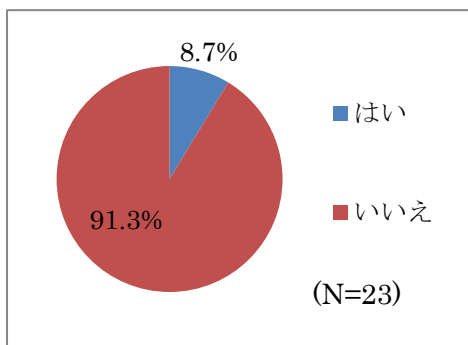


1 いじめに起因する不登校についてのアンケート調査

平成25年度に但馬やまびこの郷の宿泊体験活動に参加した児童生徒の保護者向けに標記のアンケートを実施した。(回収率:46%) そのうち、不登校あるいは不登校傾向になった要因に「いじめ」が「含まれる」「どちらかと言えば含まれる」と回答した保護者が23人であった。以下はその結果である。

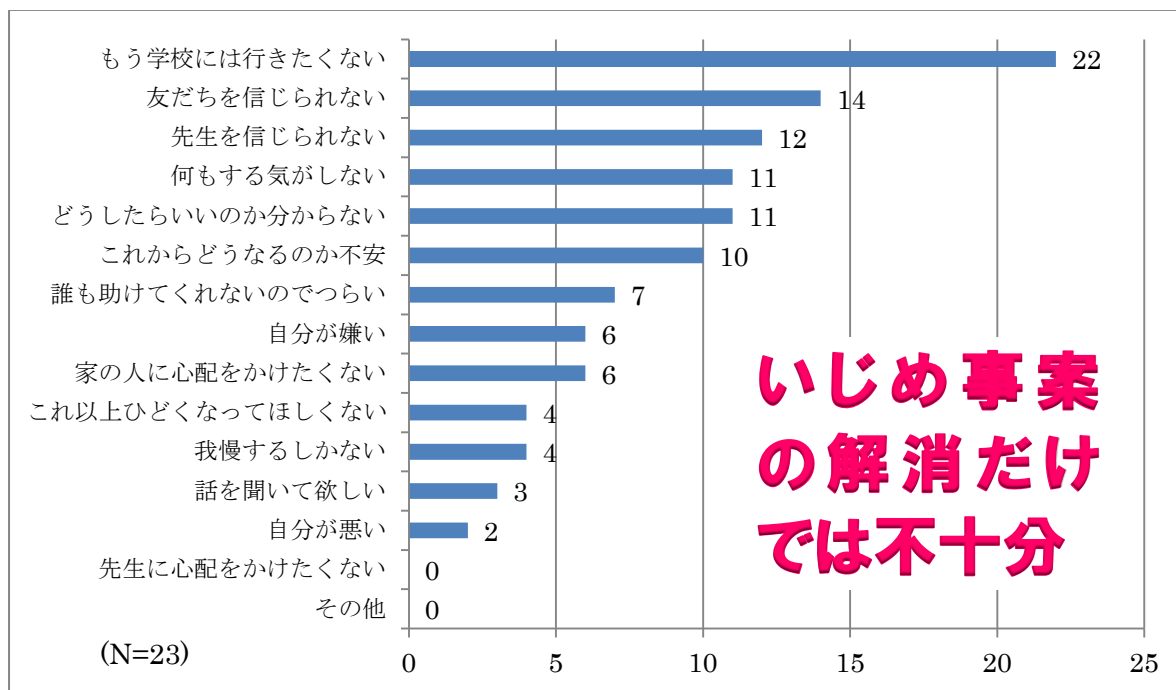
(1) 保護者がいじめに気づく前に、本人は誰かに相談できていましたか。



23名中2名の相談相手は友だちと友だちの親である。保護者が気づくところからいじめの解決に向かって動き始めることが多いので、常日頃から保護者と連携することが重要である。また、今回の調査では、保護者が気づくまで、学校関係者が関わっていないと推察され、学校としても児童生徒の変化に気づく体制作りが必要であろう。

保護者との連携

(2) 「いじめ」を受けて登校できなかった時期に、本人はどんな気持ちであったか。

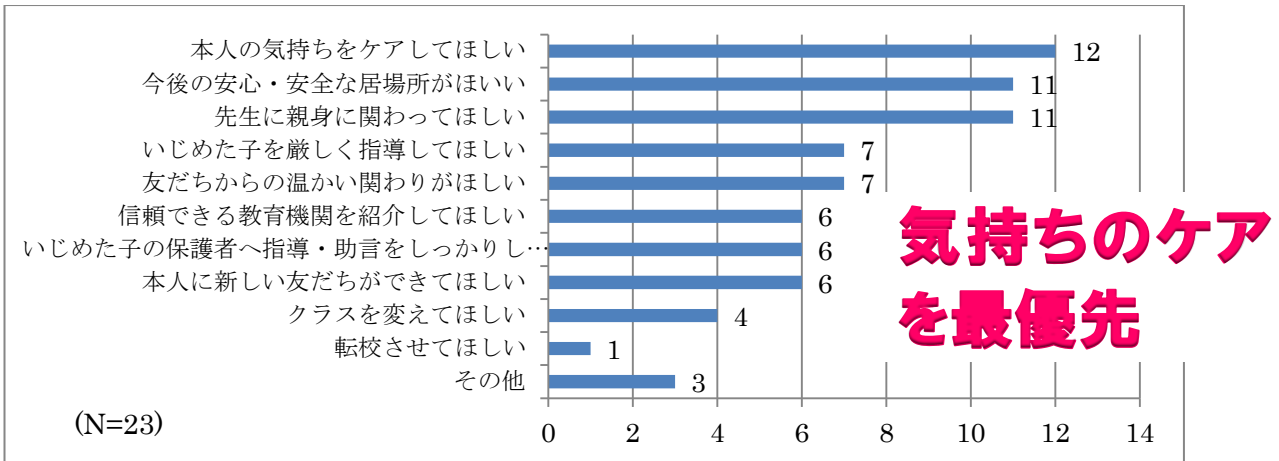


いじめ事案の解消だけでは不十分

「もう学校には行きたくない」と23名中22名が回答しており、一般的な不登校に見られる「学校に行きたいけど行けない」ではなく、学校への拒否感が強いことが伺える。

また、「人を信じられない」「何もする気がしない」「どうしたらいいのかわからない」「これからどうなるのか不安」などが上位にきており、人間への不信感と情緒的な混乱があることがわかる。いじめの問題だけを解消してもすぐに学校復帰できない状況にある。

(3) 「いじめ」を受けて登校できなかった時期に、**どんな支援**を望まれていましたか。



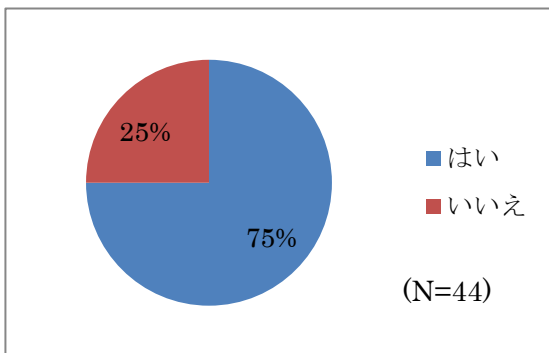
多くの保護者が「本人の気持ちをケアしてほしい」「今後の安心・安全な場所がほしい」「先生に親身にかかわってほしい」と本人へのメンタル面の支援を望まれている。

いじめ事案の客観的な解消はもちろん、信頼感の回復と情緒の安定を図ることが重要である。

2 「人との関わり」に関するアンケート調査

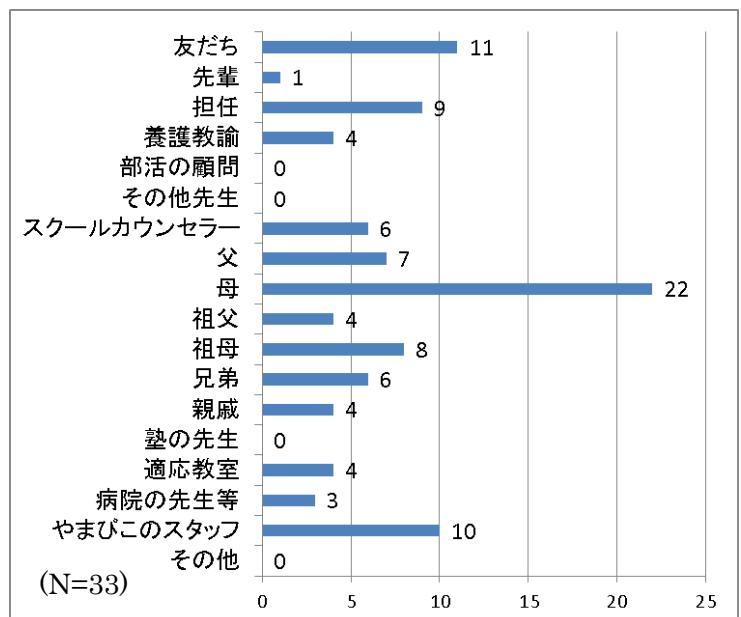
平成 26 年度に但馬やまびこの郷の宿泊体験活動に参加した児童生徒に標記のアンケートを実施した。(通算で初の宿泊となる児童生徒は心理的な負担を考慮し対象外とする。) 回答数は 44 人であった。以下はその結果である。

(1) 困ったことや悩み事があるとき **相談**しますか。



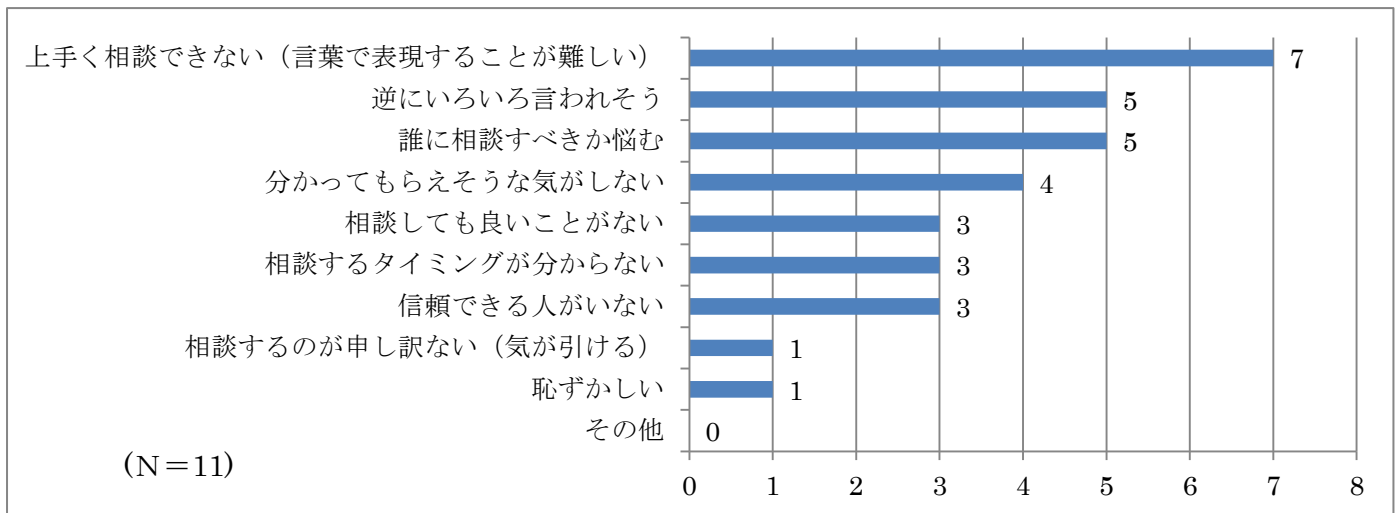
44 名中 33 名が相談すると回答している。相談相手は母を始めとする「家の人」が圧倒的に多い。他の調査と比較すると、友だちが非常に少なく、当所利用者の友だちの少なさが結果に表れているといえる。家庭内の相談だけでは解決に至らないこともあるため、やまびこのスタッフや関係機関などの第三者に相談する子どもが多いことは好ましいと言える。

(2) それは**誰**ですか



信頼できる第三者の存在

(3) 相談できない (相談しない) のはなぜですか。



「相談しない」と回答した 11 名中 7 名が「上手く相談できない」と回答しており、自分の悩みを上手く表現できない、上手く整理できないといった課題が伺える。また、11 名中 5 名が「逆にいろいろ言われそう」と回答しており、話は聞いてほしいが指示はしてほしくないという感情が伺える。「分かってもえそうな気がしない」「相談しても良いことがない」という回答からは相談に良い印象を持っていないことが考えられる。11 名中 3 名が「信頼できる人がいない」5 名が「誰に相談すべきか悩む」と回答しており、適切な相談者が見つかっていないと判断できる。

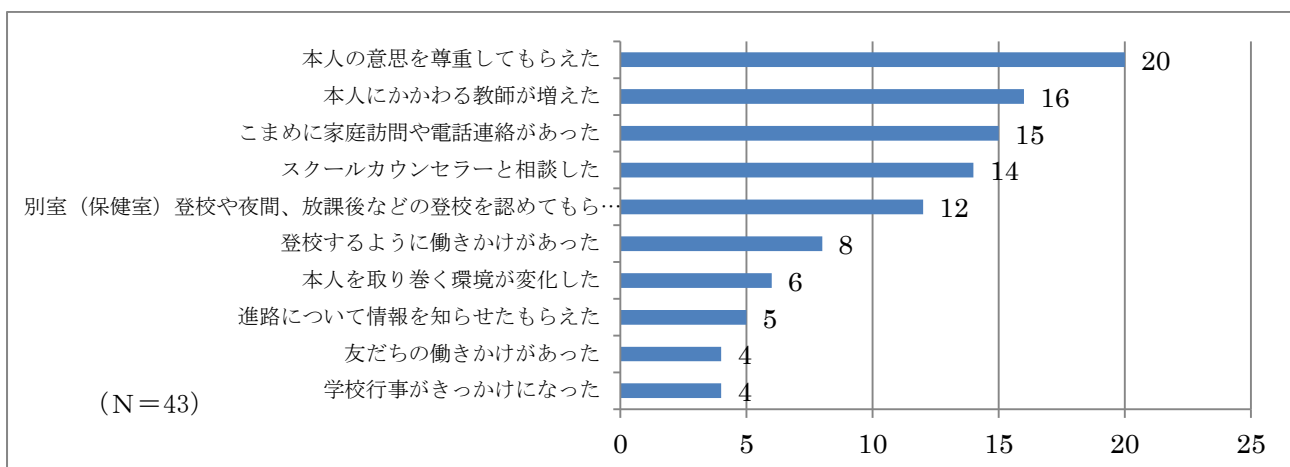
表現力の育成

聞き手の傾聴姿勢

3 学校復帰につながる要因の調査 (H25 利用者追跡調査より抜粋)

平成 25 年度に但馬やまびこの郷の宿泊体験活動に参加した児童生徒の保護者向けに標記のアンケートを実施した。(回収率：46%)

学校において、状態の改善に効果があったと思われる事柄や関わりは何ですか。



「本人の意思 (気持ち) を尊重する」「複数の教師の関わり」が上位にある。この 2 つの項目が重要であることが再認識できる結果となった。また、「家庭訪問や電話連絡」は、やはり学校とのつながりを持ち続ける意味で重要と言える。更にスクールカウンセラーの相談も引き続き上位にあり、積極的な活用が望まれる。学校行事が改善のきっかけになるケースはそんなに多くはなく、その行事を通じて教師がどのように児童生徒にアプローチするかが大切であると言える。

意思の尊重